

春風亭 昇太

(落語家)

「毎日楽しくてしょうがない」と、ご本人が、春風亭昇太を一番楽しんでいらつしやるようです。

「こいつは好きなことをとんやっとな」と言われる生き方がしたいですね。



HEALTHY SALON

Healthy Life

ヘルシーライフ

SINCE 1984 No. 114

January 2014

落語は年寄りの娯楽だと思っていました。……落語との出会いを教えてください。

昇太 進学した大学で、ラテシアメリカ研究所に入部しようと部室に行ったら誰もいなくて、帰りかけた時に「うちの部室で待ってれば？」と声をかけてくれたのが隣の落語研究部の人でした。待たせてもらっている間に彼らを眺めていたら、冗談を言い合いながらすごく楽しそうに落語の稽古をしていたんですよ。「大学4年間の目的はとにかく楽しく過ごすことだから、ここでもいいか」と、雰囲気につられて、落語研究部

に入部しちゃいました。落語は年寄りの娯楽と思っていたから、今までまったく興味はなかったんですけどね。

ある日、先輩たちとはじめて生の落語を聴きに行きました。客席に若い人や女性も居たので、ちょっとびっくりしましたね。いよいよ落語がはじまって、お爺さんが出てくると思っていたら、最初に出てきたのが現在の春風亭小朝師匠でした。当時はまだ二ツ目※1だったと思います。「愛宕山」という落語をやられて、これがめちゃくちゃ面白かった。それに小朝師匠以外の落語家さんたちの斬も面白くて引き込まれたんですよ。この衝撃的な出会いから、どんどん

落語にはまっていききました。それに興味がなかった落語がこれだけ面白くなったから、まだ自分が知らない面白くないことが他にもたくさんあるんじゃないかと思って、これ以降はいろんなことに関心を持つようになりましたね。

……どのようなきっかけで落語家の道を選ばれたのですか。

昇太 友人たちの間で就職活動の話が多くなった大学三年生の頃、僕も色々と考えました。世の中はちやうどバブル前後で、就職も売り手市場の時代です。そんな世相もあって「就職はいつでもできるから、その前に一度自分が本当にやりたいことをやって

みたい。失敗したら田舎に帰ってどこかに就職すればいいや」と、まあ不景気だったらあり得ないことを本気で思ったわけです。

演劇やコントの道も考えましたが、結局落語家を目指そうと思いました。落語はひとりであるので、自分自身の力だけがかからない。自分自身の力だけ試される世界なので、駄目だったら諦めもつくでしょ。それに大学二年生の時に日本テレビの「全国学生落語名人位決定戦」に出場して優勝したことも後押しになりました。方向性が決まったら卒業を待つ必要もありません。結局、四年生の時に大学を中退して落語家の道に進みました。



“脳ドック”のご紹介

「脳ドック(MRI検査)」とは?

一般的な脳ドックでは、MRIによって脳の断面画像と血管の3D画像を撮影し、疾患の有無を診断します。MRIは強い磁気を利用して身体の断面を撮影する検査であり、X線を使用しないため被爆がないことが特徴としてあげられます。

脳ドックで予防・早期発見が期待できるのは、主に脳出血、脳梗塞、脳動脈瘤などの脳血管疾患や、脳腫瘍、脳の萎縮などの病気です。

注: MRI (Magnetic Resonance Imaging: 磁気共鳴画像)

こんな症状・生活習慣のある方に脳ドックをお勧めします

- 高血圧
- 糖尿病
- 心疾患
- 喫煙習慣
- 肥満
- 脂質異常
- 飲酒量が多い
- 家族に脳血管疾患の病歴がある



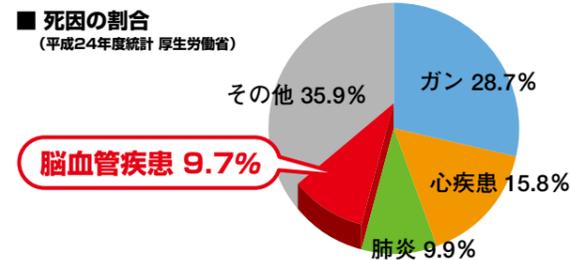
MRI装置(イメージ)

リスクの高い脳血管疾患も「脳ドック」で早期発見!

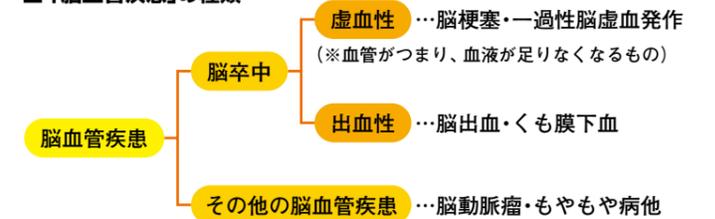
脳疾患の中でも脳血管疾患は、脳動脈に異常が起きることが原因でおこる病気です。ガン、心疾患と共に三大疾病と呼ばれ、長年にわたって日本の死亡原因において上位を占めてきました。2011年には肺炎が脳血管疾患を抜いて死亡原因の第3位となりましたが、脳血管疾患による死亡原因の割合に変化は見られず、依然として多くの方がこの病気で亡くなっています。

脳血管疾患の多くは自覚症状がほとんどなく、気がついた時には手遅れという場合が少なくありません。死亡率の高さに加え、一命を取り留めても後遺症によって生活に大きな支障をきたすことが多いのも特徴です。脳血管疾患の危険因子をできるだけ早い段階で発見し、発症を未然に防ぐために、定期的に検査を受けることが有効な予防法のひとつと言えます。

■ 死因の割合 (平成24年度統計 厚生労働省)



■ 「脳血管疾患」の種類



▶ 40歳を過ぎたら、「脳ドック」を受診し将来のリスクを回避しましょう ◀

=2014年春、横浜東口センターで脳ドックを開始します=



横浜東口センター

脳疾患の早期発見に欠かせない脳ドック。ヘルチェックでは、2014年4月の提供開始に向けて準備を進めております。皆様の健康を支える総合健診センターとして、さらに充実した検査体制を整えてまいりますので、ぜひ一度ご利用ください。

総合健診センター ヘルチェック

■ ご予約・お問い合わせ ■

TEL 東京 (03)3345-7766 FAX (045)441-8451 (東京・横浜共通)
 横浜 (045)453-1150 web www.health-check.jp
 (月曜～土曜 8:30～18:00・祝日も受付)
 ■ 受診日 月曜～土曜(祝日もご受診いただけます)



**古典も新作も
自分を表現する方法のひとつです。**

……新作落語について教えてください。

昇太 たくさんの落語を聴くうちに新作落語の面白さに惹かれ、自分も書いてみたくなって、新作落語の名手である春風亭柳昇^{※2}のところに入りました。古典落語は音楽に例えるとスタンダードナンバーみたいなもので、昔から受け継がれてきたネタを落語家がそれぞれの解釈で披露します。一方の新作落語は、落語家がイチから創り上げるまったくオリジナルです。テーマはその時の流行りものだったり、日常の些細な出来事だったり様々。創り方も人それぞれで、僕は新作落語のネタを作る時、自分に締め切りを課しています。自分を追い詰めることで、そのネタの核となるひとしずくが最後の最後にギョッと出てくる。これを期待して、創作に励んでいます。プロなら自分のネタを書くのは当然の仕事ですから、ネタ作りは当初から苦にはならなかったですね。

僕がデビューした当時、新作落語に対する風当たりは相当強かった。古典落語以外は認めな



柳昇師匠は、ご自身のマイナス点を逆手にとってお客さんの笑いを誘う落語家でした。芸人とは自分の弱点も強みに変えられる商売だということを教えてくれたのが柳昇師匠です。修行時代に「新作落語をやりたいのなら自分で書きなさい。そのためにもできるだけたくさん映画やお芝居を観なさい」「いろんなことをやってみることが大事。駄目だったらまた新しいものに挑戦すればいい」と柳昇師匠に言われました。そんな考え方のもとで自由に落語に取り組んだことが、僕の落語家としての根幹となり、後に落語以外の世界とつながるきっかけにもなりました。

今50代真っ只中。まだまだイケてる。

……大変お忙しくて、体調管理が大変ですね。

昇太 そうなんです。大きな病気の経験もなく、好き勝手に飲み食いしてきたんですが、45歳頃から健康が気になりました。ちょっと血圧が気になって病院で測ってもらったら、「あらら、昇太さん、血圧が高過ぎ。もう少し痩せないと高座でポックリ逝きますよ」とお医者さんに脅かされちゃって…。地方公演も多い仕事柄、食事管理で痩せるのはなかなか難しいので、できるだけスポーツをするようにしています。友人のラサール石井さんに誘われて気軽につきあったボクシングが面白くなっちゃって、時間を見つけてやっています。これがストレスの発散にもなり最高なんです。僕らの仕事はその日の体調や気分が大きく影響しますから、今は喉の調子など、ちょっと気になることがあるとすぐ病院に行くようにしています。何事も身体が資本ですからね。

……今後でも活躍が楽しみです。

昇太 40代の頃、10年後の自分は頭も堅くなつて、つまらない落語をやっているかもしれないと予想していたんですよ。今54歳、50代真っ只中で好奇

面白い爺さんになっている自分を想像したら、歳を重ねることも楽しい。



春風亭 昇太 さん (落語家)

- 1959年 静岡県静岡市生まれ。
- 1978年 東海大学文学部に進学、落語研究部に入部。
- 1982年 5代目春風亭柳昇に入門。前座名「昇八」を名乗る。
- 1986年 ニツ目に昇進。春風亭昇太に改める。
- 1992年 33歳の時、7人抜きで真打ち昇進。
- 2003年 春風亭小朝、笑福亭鶴瓶、立川志の輔、林家正蔵、柳家花緑と共に「六人の会」を結成。
- 2006年 日本テレビの長寿番組「笑点」大喜利メンバーに加入。

型破りな新作落語と独自の解釈を加えた古典落語で、人気を得ている。さらに演劇やドラマ、映画への出演も多く、役者としても活躍。ミュージシャンとのライブ活動、情報番組のナビゲーター、ラジオのパーソナリティなどジャンルを超えた幅広い活動を展開している。プライベートでは帽子、眼鏡、レトログッズなどの収集。プロレス、浮世絵鑑賞。旅行、城郭巡りなど多趣味で知られる。

- 主な受賞歴……NHK新人演芸コンクール 優秀賞(1989年)/浅草芸能大賞 新人賞、花形演芸大賞 金賞(1998年)/花形演芸大賞 大賞、第55回文化庁芸術祭・演芸部門 大賞(2000年)/東京スポーツ「ビートたけしのエンターテインメント賞」日本芸能大賞(2006年)等、他多数。
- 主な著書……「楽に生きるのも、楽じゃない」(1997年東京書籍)
「はじめての落語、春風亭昇太ひとり会」(2005年東京糸井重里事務所)
「城あるきのススメ」(2011年小学館) 他

■春風亭昇太公式 HP……<http://www.shunputeishota.com/>

いという落語ファンも多くて、厳しい言葉を投げかけられたこともありましたが、今ではそんなことを言う人もほとんどいらっしやいませ。古典も新作も垣根無く楽しんでくださるお客さんが本当に増えました。

……落語家として大切にされていることは何でしょう。

昇太 僕は古典落語、新作落語の両方をやりますから、今日はどちらの落語がいいか、どんなネタがいいか最終的に高座に上がってお客さんの顔を見て決めます。今日のお客さんが何を考え、求めているかをどれだけ感じ取れるかが勝負ですね。落語は演劇のカテゴリーの中のひとつだと考えていますが、演劇と決定的に違うところがあります。それは、落語は演じ手がひとりなので、全ての役柄を明確に演じ分けることができないう点です。結果として、登場人物のどこかに自分を残して演じる。そこが同じネタでも落語家によって違う味となるわけです。自分をどれだけ残すかどうかは落語家の考え方次第。僕の場合は古典落語でもなるべく春風亭昇太を残すように心掛けていて、新作落語は春風亭昇太そのものと言ってもいいくらいです。僕にとっては古典も新作も自分を表現する方法のひとつで、それぞれに演じる醍醐味があります。

**春風亭柳昇師匠との出会いが
大きかったです。**

……これまで影響を受けた出会いはありますか。

昇太 僕は舞台やテレビ、ラジオなど落語以外の仕事もさせていたのですが、こういう仕事は自分でやりたいと思ってもなかなか実現できるものではありません。これまで人との出会いや人間関係、そして運にも本当に恵まれていたと思います。多くの方たちにお世話になりながら歩んできましたけれど、やはり一番は春風亭柳昇師匠との出会いです。

心旺盛、身体の切れもまあまあだし、まだまだイケてる。予想外でした。まあこの先、自分のやりたいことより他人の評価が気になったりして、色々つまらないものにとられる時期があるかもしれない。でもそんなことを乗り越えてもっと自由になれたら、結構面白い爺さんになっているんじゃないかな。そういう自分を想像したら歳を重ねることも楽しい。



誰でもいずれば死を迎えます。その時まで豊かで平和な時代に日本人として生まれたことを感謝して、とことん人生を楽しまなきゃ損ですよ。だからこれからもいろんなことに関わっていききたいですね。僕の葬式の時、「落語一筋の人でした」と言われるより「こいつは好きなことをとことんやっただな」と言われる生き方をしたいなあ。

※1 ニツ目……落語家の階級のひとつ。見習い、前座、ニツ目、真打の順番に昇進する。だるまに、ニツ目の目を入れられるほど芸に開眼したという意味。

※2 春風亭柳昇……1920年〜2003年。5代目春風亭柳昇。20世紀後半の新作落語を代表する落語家。ひょうひょうとした語り口が特徴で落語ファンを魅了した。80歳を過ぎても高座やテレビ出演を積極的に続け、生涯現役の落語家として活躍した。